



## 主張

### 職場体験活動に思うこと

阿部善和

本県では、若者の他県への人口流出が大きな問題になっています。就職や進学のために一旦本県を離れた若者の多くは地元に戻ってこない現状があります。その主な理由は「田舎には仕事がない」です。実際はそうではありません。仕事はたくさんあります。特殊な業種を希望する場合を除けば、ほとんどの業種で、魅力のある頑張っている企業は多いのです。しかし、歯止めのかからない若者の人口流出に危機感をつのらせた自治体や地元企業が、地元にある企業の仕事を体験し理解してもらい、少しでも地元に戻るきっかけになればと「自治体や地元企業が連携して主催する職場体験活動」を立ち上げ、中学校に協力を依頼する新たな取組を始めました。

新庄市の取組を紹介します。「Shin-job」とネーミングされたこの事業は、市が中心となり、協力してくれる企業を集め、各中学校一年生を対象に出前体験授業を行うという活動です。一校あたり約一五の企業が体験ブースを校舎内に設置し、生徒一人あたり五〇分二コマの体験活動をします。「知らなかったことを知ってもらおう」ということがねらいですので、体験したいブーシの希望はとりません。昨年度で二回目の実施となりましたが、「ほかにどんな仕事があるのか知りたくなった」という生徒の感想が多く、ねら



いどおりの活動になっていきます。

鶴岡市でも同様の出前体験教室が行われています。鶴岡市の場合は、企業が中心となっていて行っています。元々は地元の高校生を対象に行っていた事業ですが、昨年度から中学生にも広げて実施しています。「Waku Waku Work」というネーミングのとおり、生徒の新たな適性を見出すことや知らなかった就職先を周知することがねらいなので、出席番号で機械的に企業を割り当て、二日間で四つの企業の仕事を体験します。

このように新たな形の職場体験活動が出てくる一方で、ほんの少しですが職場体験活動をやめる学校も出てきました。教育課程の精選が図られる中、職場体験活動の原点が忘れられ、前年度踏襲で継続しているのであれば、「精選すべき」という意見が出てくるのは当然の流れだと思います。

ただ、学校という限られた空間を飛び出して体験する、しかも地域の方が応援してくれているからこそ実施できる職場体験活動は、仕事を体験することだけにとどまらず、地域や社会の方々からたくさんの方の力を貸してくれる職場体験活動は大事にしたい活動です。だからこそ、ただのイベントとして継続するのではなく、常に原点に立ち返って、職場体験活動の意味を問いながら、新たな気持ちで進めていく活動にしなければなりませんと思います。

(全日中副会長・山形市立第五中学校長)